

一般講演Ⅲ

座長：石塚 修（信州大学）

㊦ 放射線性出血性膀胱炎に漢方薬が有効であった1例

名古屋市立大学大学院医学研究科 腎・泌尿器科学分野¹⁾
名古屋市立大学大学院看護学研究科 健康科学領域 臨床生理学分野²⁾
名古屋市立大学大学院医学研究科 医療安全管理学分野³⁾

濱川 隆¹⁾、濱本 周造¹⁾、安藤 亮介¹⁾
窪田 泰江²⁾、戸澤 啓一³⁾、安井 孝周¹⁾

【緒言】

放射線性出血性膀胱炎は、骨盤内悪性腫瘍に対する放射線照射により生じ、治療に難渋する疾患である。難治性の放射線性出血性膀胱炎に対して、経尿道的電気凝固術(TUC)や、ミョウバン、硝酸銀などの膀胱内注入療法が行われるが、その効果は一過性のことが多い。近年では高圧酸素療法も選択肢となるが、施行できる施設に限られ治療期間が長いなどの問題点がある。今回、前立腺癌に対する強度変調放射線療法(IMRT)後の放射線性出血性膀胱炎に対して、漢方薬の投与によって肉眼的血尿が消失した1例を報告する。

【症例】

71歳男性。前立腺癌に対して平成19年にIMRT(72.6Gy)を施行した。平成24年8月、肉眼的血尿、排尿困難にて当科を受診し、膀胱内に多量の凝血塊を認めた。明らかな腫瘍性病変は認めず、放射線性出血性膀胱炎と診断した。同年9月、TUCを施行し止血が得られた。その後、再出血を認めなかったが、平成25年7月、再び肉眼的血尿が出現し、膀胱内血腫による尿閉となり、持続膀胱洗浄とカルバゾクロムスルホン酸ナトリウムの投与を行なった。しかし、再出血を繰り返すため、同年8月に再度TUCを行なった。その直後から、再度、持続膀胱洗浄を要する血尿が出現したため、止血効果を期待して黄連解毒湯の内服を開始した。内服4日目から肉眼的血尿は改善し、内服10日目には顕微鏡的血尿も消失した。病状の改善が得られたため内服を終了した。その後4年間、入院加療を要する肉眼的血尿は認めなかった。

【考察】

黄連解毒湯は、黄芩、黄連、山梔子、黄柏の4つの生薬からなる。止血作用や抗炎症作用を持ち、鼻出血や消化管出血に有用であるとされている。本症例でも速やかに止血効果が得られており、治療に難渋する放射線性出血性膀胱炎に有用な選択肢となると考えられた。